

貸貨物語（4）

ブンチョウ秘話

小野 友貴枝

（1）

佐々木妙子がドアを開けたとたんゲージの中のブンチョウが動き出す。この音を聞くと妙子は、一人住まいを忘れる。彼女の姿を見つけると反射的に声を挙げた。チツ、チツと、これがブンチョウ、マオの「待つてました」という合図。妙子もマオに会いたくて、駅からどこにも寄らずに急いで帰ってきた。

手に持っていた鍵を棚の上に放り投げ、ゲージを開けた。一日留守にしていたから心配したが、マオは元氣良く羽を広げ飛び出した。

ブンチョウはさみしがり屋で、一日だけでも留守にできない。

白い顎、頭部は黒、雛の時から変わらない。背中全体は品のいいグレイの毛、オスは背中に黒が混じっているからすばやい感じがする。丸みを帯びて飛ぶ姿をみると妙子は握りしめたくなる。

「マオ、ただいま。大人しくしていた」と、詫びを言

いながらつかもうとするがマオは、妙子を見無視して、肩を飛び越え、食器棚に載って体制を見ている。

「マオ」と名付けてくれたのは、甥の泰一である。

昨年、姉の病氣見舞いに、阿佐ヶ谷の自宅まで行ったときに、泰一が隣の部屋から出てきて、「おばさん、僕の友達」と言つて等身大の鳥かごを持ってきた。

二階づくりの姉の家は、道路際の二階に玄関が二つある。そこは、二世帯住むようにできていて間取りは全く同じ。そして南向きに居間があつて、この部屋から、姉と長男の泰一はつながる。鍵がかかるのは姉の方からで、普段は出入りできない。外階段のある二階は独身者用のアパート四世帯。この造りを考えたのは姉で、やがて泰一が独りでも生きられるようにと、収入の手を打つてある。

妙子が訪ねると、姉の佐和は、必ず泰一を呼ぶ。自分が老い先短いを知つていて、妙子に、独身の泰一の今を見せておこうという配慮である。

「小鳥が友達なの、彼女はどうしました」と、妙子は、先々月会つた時の情報を確認する。

「まだ、付き合つていますよ。ときどき箱根に行く」

「良かった。それで今日は、小鳥たちをどうして」

「僕、小鳥屋で、アルバイト始めたのだ。だから鳥た

ちとしゃべれる。僕の声に小鳥が合わせてくれる」

小学生と話しているようで楽しい。

「すごいじゃないの、鳥籠、みんな見せて」

「そう来ると思った。一番大きいのが、セキセイインコ。次がヘキチョウ、キンパラチョウ、テンニンチョウ、オウゴンチョウ、ブンチョウ。忘れないように名前を付けたカードを下げしておく」

「すごい、アルファベットで書いてある。一緒に飼っていても喧嘩しないの」

「しないさ、一応透明なビニールで仕切りはあるけど行ったり来たり出来る。好みに合わせて水場も作ってある」

ゲージを覗くと、確かに止まり木や餌の器まで区切って並んでいる。

「小鳥を世話するのが楽しそうね、いつからこんな趣味に」

「小鳥屋のアルバイトがあったから、申し込んだら、採用されたので。もう一年はたつよね」

「泰一が、小鳥に凝ると思ってもみなかった」

「だって仕事が楽しい。掃除しながら、鳥たちとしゃべる、僕の言葉が好きらしく、入ってゆくと、チュッと騒ぐよ。前のアルバイトは、僕には向かなか

った」

「襖の仕事よね、絵が上手だから、合っていると思っ
ていたけど」

「売り物は神経使うよ、絵の具を落としただけでも大声で叱られる」

奏一の話が長くなる。姉の見舞いに来て、未だ姉の具合も訊いていない。認知症も進んでいるようだ。室内が洋服だらけ。もう、五月に入っているのに冬物一杯だ。掃除もそちのけで、泰一と小鳥談義になっ
てしまった。

「佐和ちゃん、具合どうですか」と、姉に向かって尋ねた。

「大丈夫よ。娘が一日おきに通ってきてくれる」姉には2人の嫁いだ娘がいる。どの子も親思いで、欠かさずに通ってきて、在宅介護をしてくれている。

「炬燵も、そろそろいらぬのじゃない」

「娘も、そう言うんだけど、でもほら、梅雨の中は寒い日があるよね。大丈夫、これがあるとここでご飯も食べられるし、きどころ寝もできる」

「それも、そうね。ときどき干してね。さて、では帰ろうかな。散歩がてら学校の辺まで送ってよ」

「妙子おばさん、小鳥持っていけない」

泰一から、思いがけない、プレゼントの声がかかった。

「どれどれ、おばさん鳥飼ったことないよ。あ、小さい時、メジロ飼った。弟が、鳥もちを仕掛けてメジロを生け捕りにした」

「そんなら、安心だ、これもって行きな。ブンチョウがいちばん飼いやすい。人になつき易いから。番で飼うと卵を産むよ」

「いいの。泰ちゃん、寂しくなるでしょう」

「大丈夫、新しいのを買う予定だったから、今度は色を楽しむサクラブンチョウにする」

「じゃ、頂きます。籠あるかしら」

「ある、ある」

と言って泰一は立ち上がった。上背のある子だ。なぜか首も長い。

昔のことだが、泰一の出産した日は忘れられない。

泰一は、大変難産だった。姉の夫が出張だったこともあって、妙子は、姉の出産に立ちあつた。

普通、初産であっても、一昼夜あれば出産ができるのに、一日半かかった。この経過に立ち会った妙子は、泰一が障害児でなければいいがと、その時思った。さ

いよいよ言葉や歩行は普通に発達していったが、どこかおかしいと感じるものがあつた。例えば、デパート、遊園地に連れ出すと、必ず迷子になる。子供は、母の位置を確かめながら動き回るものだが、泰一は途方もないところへ行ってしまう、そのたびに警察に保護された。順調に学校に入り成績には問題なかったが、友人関係が悪く、友達ができなかっただけでなく、いじめられて帰ってくるが多かった。中学二年生になったとき、精神科で診察を受けるようにと、専門の医師を紹介された。

その結果、泰一は*ADHDという診断がついた。

姉は、泰一の精神疾患を認められず、進学に拘り、美術大学を受けさせようとしていた。その結果、彼は、何度も失敗し、大学の門がくぐれなかった。

仕事に就けない泰一を姉は、「絵がうまくなると信じ」襖屋で筆を持つアルバイトを続けさせてきた。しかし、いつの間にか。「画家になる」と言う夢をあきらめた泰一は、自宅にこもるようになった。

最近、五十歳になった彼は、小鳥屋のアルバイトに嵌まり、絵よりも小鳥を育てる楽しみを手に入れていた。

泰一がいれば姉の在宅療養は安泰だろうと、この奇

遇に感謝して妙子は帰路についた。

そして、妙子も、他人事でない自分の生活を守らなければならぬ。

妙子は、自分の生活、マンションの階下からのど突きによる、生活妨害から逃れるために、これから、対策を講じなければならぬ。

マンションの同じ階、隣の部屋に住む、竹下美容院の常連客でもある妙子は、ある日、カットをしてもらっているときに、階下からの物音に悩んでいることを打ち明けた。

「ひどい音が下から聞こえるのよ。毎晩眠れない」と相談すると、

竹下美容師は、既に聞いていたのか、気軽に、

「夜だけ、別の家に泊まったらどうかしら」と助言してくれた。

「夜だけ、泊まらせてくれるところなどないでしょう」

「知り合いのおばあちゃんの家の一階、空いているよ」

「個人の家ですか」

「息子さんが住んでいたけど、今はいない。そのおばあちゃん、電気代ぐらい頂ければ、泊まっていいたいというので、私も気分転換に時々利用させてもらっていた。

前は、独り暮らしの人に貸していたので、階段は外にある、もちろんトイレと簡単なキッチンもある。風呂はないけど、一万円出せば、好きなだけ泊めてくれるよ」

「頼もつかしら、そこでゆっくり眠れたなら、こんないいことはない」

「そうだね。聞いておいてあげる。契約なんかいらぬいから、知り合いということかどうかしら」

「助かるわ、話しておいて」と、鏡の前に座ったまま決まって、妙子は、一晚千円で泊まらせてもらうことにした。

マンションの近くで、夜八時過ぎに出て、朝六時には帰ってこられる。毎晩は往かなくても大丈夫だろうと決めて、ブンチョウは置いておくことにした。

六月で暑い季節になってはいたが、未だ冷房はいらない。寝具だけ用意して通っている。

この部屋は、独り用の間取りで、付属品は何もない。

六畳の部屋、キッチンがあるだけ、机もない。

階下からの音が二晩続いたときには、泊まる。簡単な寝具を用意しているの、部屋が狭いが、我慢する。

マンションにブンチョウを置いてゆけば、心配だし、そうかといって、契約もしないで借りた二階、下には

独り暮らしのおばあちゃんが住んでいる。

ブンチョウの鳴き声を下の階に訊かれたら、もうそれで終わりだ、部屋は追い出されるだろう。ブンチョウと一緒に泊まれるところがなく、妙子は、一生懸命考えた、その結果、やはり契約で泊まれるアパートを捜そうと思った。

おばあちゃんの二階で夜を過ごす、夜中、目覚めることなく朝を迎えられた。この経験から、もうマンションだけで夜を過ごすことはできない。もし下の住人水島鉄夫が改心して、ど突きを止めてくれれば別だが、それまではアパートに泊まろうと決めた。

妙子は、このマンションを買った三年前のことを思い出す。駅から三分で、マンションのはしり、五十年代のものであるがグレイに縁どられた濃い紫がドイツ風で気に入って買った。造りも丈夫そうだと、思った。もちろんマンションの名は、ペガサスと言った。西と東がある二棟づくり。

その東棟の七階、十二室並んだ、南側の三番目を買った。

そんな便利なマンションを手に入れ、優雅に生活しようと思っていたのに、今は、夜泊まるアパートを探

している。

この「ど突き」の人、不眠症にさせられた人との出合いを思い出す。

鶴丸駅に降りた三年前の三月、まだ寒かった。半コート着ていた。マンションに引越してきてから、この土地は、温泉が出るというだけあって、その地熱のせいか暖かい。みんな、もう厚い上着を脱いでいる。手袋も取って、マンションの方向に向かおうとした時に、コンクリートの置石に座っていた初老の男に声を掛けられた。

「新しく入られた佐々木さんですね。よろしく。僕はあなたの真下の階の水島鉄夫と言います。お互いに独身ですから、なんかありましたら、相談にのります」と言って両手を出した。佐々木は、初対面の彼に「よろしく」と右手を出して握手した。骨の太い彼の手が、ざわざわしていた。彼の馴れ馴れしさがちよつと気になったし、ここでずっと佐々木を待っていたということも気になったが、鼻の高い口元のしまった彼に、弟の印象がダブった。ことによると佐々木より五歳ぐらい若いかもしれないと筋肉質の彼に好感を持った。

その後、水島鉄夫、彼に会ったのはマンションの出口で、数回、いや、駅で待ち伏せされたこともある。

仕事から帰って来た時に、駅の改札口で、待っていたかのように、こちらを見て挨拶された。

妙子は、こんな初老の男知らない、顔を見ないように、無視して通り抜けたつもりだが、彼は、彼女に合わせてついてきた。もちろん彼の恰好はひどい。陽気が暖かくなっている五月なのに、厚地のデニムのジヤンパーに、ぶくぶくしたズボンを履いている。まるで寒い時の恰好だ、頭にはベ이스ターズの野球帽が載っている。

後ろについてくる彼を無視してエレベーターで七階に登った。佐々木は、待ち伏せされたことに、ぞつとした。このマンションで、未永く生活したいと思つて、知人の紹介で引越してきたのに、また、何かいわくがありそうな予感がした。

東北から神奈川県に出してきた妙子は、地方自治体の寮に住み、定年まぢかにマンションを買った。独身であつたせい、値の張る新築マンションに住むことができた。東海道沿線のそのマンションを皮切りに、今まで3回マンションを買い換えた。そのたび、いつも

上の階の子供、両隣りの家族の騒音に悩まされ、やむなく退去してきた。

妙子は、駅から三分で帰れるマンションを三回目で見に入れた。それも大磯から湘南地域、相模湾までの眺望を手にしたというのに、ここで思わぬ暴音に悩まされるのは思つてもみなかった。

この現象を仲間に話すと、それは珍しいという。下の階からの音は、普通であれば、水道水の音か、パイプの音が多いというのに、人工的に天井を突く音、振動は意外だという。

初夏のある朝、駅から三分ともかからない、マンションについてエレベーターに乗ろうとすると、そこに下の階の水島鉄夫がいた。しまった、おばあちゃんの二階から、朝帰りのところを見られた。

知らないようなふりして通ろうと思つたが、六階まで傍についてくる。彼は、朝食の買物袋を持っている。袋は、駅前のスーパの表示だ。

「おはようございます」と言つて彼と二人になった緊張感を緩めた。

「夕べいなかつたみたいだったけど、どこかへ」「いりましたよ、早く眠つちやいました」

「それで、音がしなかったのかな」髭の伸びた、細い唇に苦笑いを滲ませていった。

「音って何ですか、私は余分な音はたてませんよ」

妙子は、いらだった気持ちを隠さずに言った。なぜ、こんな人と会話をしなければならぬのだろう。無視すればよかった。

「それがな、眠ろうとすると上から音がするんだ、ダ、ダ、ダとすごい音なんだ。駆けずり回って居るような」

「そんなことありませんよ、厚いクッションも敷いていますし、音もたてないようにしている」

「いやお宅は、小鳥も飼っているだろう、その音も聞こえる」

「嘘でしょう、ブンチョウは、音を立てませんから、ゲージに入っているし」

「水浴びの音が聞こえる。ぶちやぶちやと」

「どこから聞いているのですか。そんな音は下の階に聞こえるはずないでしょう、おかしいですよ」

「いや、小鳥の声は、高いから、聞こえるのだ」

「聞き耳は止めてくださいよ。私は、お宅の音の方が迷惑しているのですから。いい加減に、私に向かって太い棒のようなもので突き上げないでください。警察に訴えますよ」

「俺は、何にも音を立ててない」

「そんならいいですが、私には聞こえるのですけど、分かりました。これから音がしたら、録音しますから、それをもつて管理人に訴えます」

「なんだって、俺は知っている、お前が飼っている小鳥は、このマンションでは規則違反だからな」

「そうですね、マンションの規則に書いてあるかどうか調べてみます」

「それと、なんだね、あんたは、駅の西の方に歩いているが、何しているのだ」

「あんたに関係ないでしょう、知り合いがいるから、会いに行くだけです」

エレベーターはとつくにマンションの屋上を過ぎて、下に向かっていく。

二人は、地下の通路の前まで降りた。妙子もこの際だからと確かめたくて気になっていることをしゃべってしまつた。これ以上、立ち話をしていると、喧嘩になりそうだ、止めた方がいい。

「思い過ぎでしたら、ごめんなさい」と丁寧に言って、先に乗り、上りのエレベーターを閉じた。

この時、妙子は、妙な感覚を持った。水島鉄夫は、妙子に親しみを持っているのではないかという、鳥肌

立つほどの嫌悪感、間違いない。彼は、妙子に、独り暮らしということで親近感を持ったようだ。だから、彼流のメッセージを天井の枠を超えてまで、執拗に天井を突いているに違いない。この行為を放っておくことの危険を感じた。

「どうしたらいいのだろう、彼に立ち向かってでも負ける、ど突きを無視するか、それとも、姑息的な方法ではなく、本気で逃げるか、その方法を考えなければならぬ」

それから、二週間後、おばあちゃんの二階への階段に上がろうとしたときに彼が後ろに立っていた。

「やはりここだと、思っていた。どうして、マンションで寝ないのかな、勿体ないよ」

「なに言ってるのですか、どこに泊まろうが勝手にしよう」

「そうだけど、夜ブンチョウが鳴いているぞ、それが聞こえる」

「エ、どうして。ブンチョウはゲージに入れてきています。鳴くわけじゃないでしょう」

「そうかな、一晩中鳴いていた。かわいそうだよ」

「そんなことありません、そんなわけない」

「どうかな、だつて声が高いので、一晩中聞こえるよ、ピッ、ピッ、ピッと。寂しそうに聞こえる」

「エ」と思った。そして水島のいうことに、なんか真実がある。彼は、佐々木のベランダに、盗聴器でもおいているのだろうか。

「あなたがいないので、ブンチョウが鳴くのでしよう、そのアパートに泊まるのなら連れてきた方がいいぞ」

「あなたが、ど突きするから、でしょう」

「いや、俺はやっていない。ましてあなたがいない時にやってもしょうがないじゃないか、だって、俺はあんたがいるときにあいさつ代わりにやったけど、それも一度か二度だけだよ」

「真夜中にやるでしょう。私はいつもその音で目が覚めるから、アパートに来てゆつくり眠りたいの」

直に話し合えてよかった。真夜中のだ突きは本人はやっていないというけど。しかし、本当に聞こえるのだ。丁度眠った、その間に、数回太い棒で突き上げてくる。これは夢ではない確かな音だ。それを否定されてしまうと、自分が力説している意味がなくなる。

「ここでもうやらないと約束してください」

「約束するも何もやってない、それは、はじめのころは、何度か、箒でやったことがあるけど、それから、

あなたの寢室を目指してやったことではない、もし、突く音がしたら、やり返していい」

「じゃ、必ずやり返しますよ、いいですね」

「いいよ、やらないから」

「これで安心した、今晚から静かに眠れる」と思うと笑みがこぼれた。

妙子は、買い物袋を大げさに振って、エレベーターに乗った。今日偶然にも彼とエレベーターに乗れただけでも良かった。三か月前に比べると彼の顔が太って丸くなった。大きなサングラスで、表情を隠しているからよくわからないが、若く見える。きつと、妻を亡くして立ち直ったのだろう、いやあの時にはアルコールが入っていたのだ。今日はしっかりしている。

マンションに戻って、ブンチョウを室内に放して、妙子は肩を叩く。ここに乗ってほしいと、メッセージをだすが、窓際の柵から動かない。

「マオ、おはよう、ここへおいで」と腕を叩く。ピッと単純に返事していたが、だんだん、「ケ、ケ、ケ、ケ」とせかすようになった。

「お腹空いているのね、ゴメン」

「はい餌」とテーブルの上に皿を置く。マオは、それ

を見ているが、こつちにも寄ってこない

「じゃ、お好きにどうぞと、傍を離れる。キッチンに入って、洗い場で仕事をして戻ってくると、マオは、テーブルの上で羽繕いをしている。待っていてくれたの、という気持ちを込めて彼をそつと手の中に入れる。捕まえても逃げない。この感触は、久しぶりだ。何が、久しぶりかかと、思い出そうとするが、はつきりしない。

妙子はその場を離れると、彼はス、ス、と傍に寄ってくる。子供用の餌を、ゆっくり突く。

「そうか、誰も見ていないところで食べたいのか」と合点がいった。テーブルの上で食べる様子を見ていると、くちばしで突いてすぐに飲み込んでしまう。

生きている動物というのか、それとも、同居者がいるというのか、なんか元気が出る。家族を持った感じがする。

マオは、鳴き声で気持ちを表す。飼い主、妙子を呼ぶとき、「チッ！ケ、チッ」と呼ぶ。

「そんなに、お腹が空いたとか」

「チッ、チュー」と嘴を上にして妙子に伝える。それでいて、羽繕いをして、妙子を見無視する。これは、マオの拗ねかただ。独りにしていた時間が長いと、一時、

妙子の傍に寄らない。

そこにはは餌をあげないよ、と声に出して「オイデ」と両手を述べた。マオは、妙子の両手に戻ってきた。「オイデ」が大好きだ、時々、その言葉に反応して「オーオー」と答える。ブンチョウも、オームのように、母音なら言葉を言うようになる。舌の発達なのか、訓練なのか分からない。一人で、寂しかったのよね、「ごめん」と、彼の傍で話しかけた。

すっかり、相棒らしくなった。両手の掌に乗ったマオに分かるように、「オルスバン、ゴクロウサマ」と言ったが、彼はそっぽを向いたままだ。まだ拗ねている、餌が先だと言わんばかりに妙子を見ない。姉のところ^{（風い）}に飼われていた時には、番だったが、今はオス一羽だ。一羽で飼うのは精神的によくはないのだろう、でも番で飼うほどゆとりがない。妙子も独り暮らし、マオも自分オスだけと決めている。

最近、妙子が在室しているときだけ狙ってくる、風呂に入って水音がしているときや、寝静まった夜中に、棒で突き上げる。寝ている場所が確実に分かるらしく、見ているかのようにマットの下に命中する。

どうして命中するのか分からない。トイレ、風呂も

入っているとき必ずやられる、外れたことがない。

昨晚もやられた、夜中の一時だった。突き上げる音が間違いないくマットに当たった。気味が悪く別の部屋に逃げた。その部屋で眠ったところを見計らってまた棒を突き上げられた。

その時の様子を再現すると、妙子は九時に横になって、テレビを観ていた。西村京太郎のサスペンスドラマ、「十津川警部シリーズ」が好きで、昼中録画しておく。特急列車の旅は、到着した土地の旅情もあって、引き込まれる。さらに刑事役の渡瀬恒彦が、妙子と同年代だけあって、楽しませてくれる。

テレビに夢中になっているその最中である。妙子は音をたてるほど体を動かしてはいなかった。しかし、突き上げられた、それも十数回、十五分近く。本当なら、警察に訴えてもいいのだろう、この突き上げ方は異常だ。

六月に入るといく晩も、下からのど突きは止まなかった。だんだん激しさが増してきた。もちろん、妙子は、それに負けないように足音で反撃した、やればやる程、下からの音は激しさを増す。一晩中眠れない日が続いた。

真下、六階の水島鉄夫は、今回が初めてではなかった、前の人も、煩いと攻撃したために、激しくなったので諦め、無抵抗で闘ったと聞く。

妙子のようにやられればやり返すということとはなかったらしい。水島が今回のように毎晩狙ってくるようになったのは、彼女が、必ず反抗するからで、管理組合の人の忠告に従って、反応しなければ、おとなしくなると言われる。

まるで、妙子が反応するから、事が大きくなったのだと言わんばかりだ。

「じゃ、私の反撃行為が、直接の刺激になって、大きくなったというわけ。真夜中の彼のど突きが、どのくらいしつこいか、知らないのだ。毎晩毎晩やられてみなさいよ。眠れないほどしつこいものだから」

と、妙子は、本当のことを言っているのに、オーバーに言っているとられ、かえって敵を多くしてしまつた。毎晩毎晩、やられているこのつらさを理解してくれる人はいない。

警察に訴えたが、それは、犯罪とは言えない、話し合いの上、管理組合の人と相談してくださいと、同じ回答になってしまった。

さらに、管理組合は、「この程度の騒音は、マンション

ンにはつきもので、我慢してもどうしてもいやだったからマンションを出るほかはないでしょう」と言わんばかりだ。マンションの上下関係、音のトラブルはつきものだ、対抗しないで、じっと我慢してほしいと言われて、彼女は途方にくれた。もう一晩でもこの部屋では寝れないと諦め、夜だけでも泊まれるアパートを捜しに外へ出た。

まず最初に寄つた不動産屋は、マンションから、道路の反対側にあつた。

「夜だけ眠りたい部屋が欲しいのです。一間の部屋とトイレと洗面所があれば、角部屋でも結構です」

「一人暮らしの女性が使っていた部屋があります。ここから線路向こうになりますけど」

「近いところの方がいいから、案内してください」

係員は、「見るだけでも」と言つて案内図をもつて、ズックの足さばきも軽やかにとつと先に行く。佐々木がどんな事情で、マンションの部屋で眠れないかということ、その説明を訊かない。部屋を貸し出せばいいと思つている。それとも「なぜ」と訊くのは野暮なのかもしれない。

先に行く彼女に追いついて、

「その部屋を借りていた人は誰ですか。学生さん」と意味もないことを訊いた。

「どなたが使っていたかは、関係ありません。佐々木さんの下見で決められたらいいと思いますよ」

「男性だったら臭いが残っているかもしれないかもしれませんで」

「きれいに消毒しますから大丈夫ですよ。これから行くところも男性が入っていた二階屋です。でも、女性も入っていたことがありますから、大丈夫です。気にしないでください。賃料が四万円以下、それも駅チカは、空いているとすぐに入ってしまうので」

「音の静かなところなら、ある程度のことはい我慢します」

「ここは、管理人が一階に住んでいますから、安心してすよ」

妙子は、アパート暮らしをしたことがないので、音がうるさくないところならどこでもいいと、腹を決めていた。

このミヅホ荘は、駅から七分の所にあつて、独り暮らし専用賃貸している。

まず、建物がしっかりしているかどうか。妙子はアパートに入って、二階まで上がって足踏みしてみた。

部屋からの音も、静かで、足音も反響しない。鉄筋が入っていることが分かった。二階に廊下挟んで七部屋、下は、管理人室があつて六部屋という造りだ。

一階の部屋を借りた佐々木は、しばらく使われていない部屋の埃を払った。この部屋の窓は少ないのに、よくこれだけ、埃が積もったのだろうと、想像した。きつと前の人は、掃除が苦手だったのかもしれない、男の臭いがする。なぜ分かるかというと、やはり整髪料なのだろう、バスルームから漂ってくる。でもそんなことを気にしていたのでは生活できない。

掃除が終わった次の朝、布団一式とファンヒーターをタクシーで運んだ。これで今晚から、眠れる。

しかし、この一階の部屋は、管理人室の真向かいにあつて、朝、五時になると、七十歳近い男の管理人が母屋から入ってくる。その時、廊下も清掃するらしく、箒の音がする。なんでこんなに、朝早くからと思ったが、その物音に目が覚めてしまった。何しろ、彼の掃除は普通の室内ホウキでござと履きだす、誰でも起きていると思うのか、ホウキが戸に当たっても平気だ。部屋の中で眠っている人には関係ない。ガサゴソガサゴソ、音ばかり聞こえる。狭い廊下、ここは靴で通るところだ、汚れるのは当たり前だ。

「おはようございます」と入口の戸を開けて挨拶した。
「おはよう、うるさかったかな。早起きなものだから。
一気にやっつけてしまいたくなる」

「でも、まだ五時ですよ。なんでこんなに朝早くから、
ほかの人は、仕事ですか」

「いやまだ、寝ている。みんな慣れていて起きてこない」

「私は、物音に敏感なのか、昨夜も遅くまで、廊下を行ったり来たり、靴音を立てて通るので、眠れなかったのです」

「あ、それは、遅く帰る人もいるでしょう。外階段から出入りできるようになってはいるんですが、用心のために、ここから」

「それはいいのですが、未だ隣も寝ていますよ。皆さんは仕事持ちなのでしょう」と言つて妙子は引つ込んだ、なんとという管理人なのか、しかし、管理人は表向きの用事で、入居者の動静を探っているような気もある。朝夕、管理人にバタバタと音をたてられては、溜まったものではない。

次の朝も同じように、五時になると、廊下から、談話室、そして入り口などの掃除を始める。慣れてみるとびっくりすることばかりだ、アパートの入り口の右

手の部屋、そこに彼は、寝泊まりしていた。彼がどこに寝泊まりしてもおかしくないのだが、入居者の管理をするために、目の前の母屋に戻らず、ここに寝泊まりする部屋を作つて、朝早くから、廊下を掃除したり、または出勤する人を見送っている。「行つてらっしゃい」と。なんだこれは女子寮と同じじゃないかと、妙子は、違和感を覚えるようになった。

それだけでなく、妙子は、いつも同じグレイのＴシャツに黒いトレーナーを履いた管理人に見張られているような気がした。

「私は見張られているのだ」なぜ、と思うと、いつの間にか、彼が、彼女の留守の時には、合鍵で自由に入りしているのかもしれないと憶測する、この生活も安心ではない、と思うようになった。

このまま部屋にいいのだろうか、と心配になってきた。管理人は六十代で、退職したサラリーマン風。なのに、自分のアパートと言つても、朝から掃除をするタイプではない、きっと狙いがある。女性の入居者を狙っているに違いない。彼が持っていた合鍵は、妙子の分もあるはずだ、この部屋で物音におびえていたのでは、マンションと同じだ。

三か月しか泊まらない妙子だが、さつそく、不動産

屋に行つて事情を話しアパートの解約を申し出た。

九月の長雨に、ベランダのヒマワリもダリアも首を垂れている。こう毎日雨ばかり降つたのでは、元気が出ない。一番元気がいいのは、アジサイだ。紫色が鮮明で、黄色は陽が欲しいと思うのか色が薄い。

妙子は、家の戸を全部開ける。この七階のマンションから、小田急線がよく見える。小田急線のトンネルが出入りする時の景色も好きだ。

「あ、出てきた」出てきて間もなく、駅に着く。トンネル出るときが、ホーム十輛車線一杯に止まる、先端は、コンクリートの切れるところにびたつと止まる。

この芸は長年のキャリアがなければ無理だ、と思つて敬服していたが、物知り男の人に聞くと、何ということない、数メートル先の線路に停まる制御装置があるからどんな運転手でも、正確に停められるらしい。

「このマンションに引つ越してきて、三年経つ。マンションの位置も、高さも、そして外の眺めも好きなのに、なぜか、真下の水島に、ど突かれています。昨晩も、その前も棒で突き上げられる音で、眠れなかった、いやだね」と、妙子は、マオに独り言を言った。

だから、今日は、このマンションを幹旋してくれた

地下の不動産屋に相談に行つてきた。

「真夜中に、私の寝ている、ちようど真下、そこを下の部屋から突くのです。前からそんなことはありませんが、最近、ちよいちよいとやるもので」

「突かれた時に、どうするのですか」

「口惜しいから畳を叩きます。すると止みます。それだけでなく、家で飼っている、ブンチョウが喚ぐのです。いつもなら、ブンチョウが静かになるのを待つて眠るのですが、最近、ブンチョウの方が怖がります」

「なぜ、ブンチョウが」

「私が怖がると、一心同体なのか、ゲージの中で暴れるのです」

「一心同体……」

「かもしれない、ともかく、下からの突き上げは、困ります。なんでこんなことやるのでしょうか」

「今までそんな苦情はありませんでした。下の水島さんもマンション歴は長いですよ」

「ずっと独身ですか」

「いや、四、五年前、佐々木さんが引つ越す前に、奥さんを亡くしています。奥さんは中国人でしたね。その後、独り暮らしではありませんが、今までは、そんな相談は入りませんでした。酒飲みだということは聞い

ていますが、しかし、上の人に嫌がらせするとは、聞いていませんよ。あなたがじきに反応するから、面白がつているのじゃないかしら。反応しなかつたら、きつとおとなしくなるとか」

「そうですか、それで、私が今日、相談に来たのは、夜だけ泊まれる部屋を探しに来たのです」

不動産屋は理解しがたいという感じだったが、それでも契約件数が伸びるので、ありがたい、と思うのか、気安く応じてくれた。

「アパートの一階に住めればいいけど、夜だけですから」

「そうですね、じゃ、キッチンはこのままで、お風呂はいらない」

「ハイ大丈夫です。マンションで入って行きますから、出来ましたら、駅から十分の所を希望します」

「明日、また来てください、二、三見に行けるような所をあたっておきます。入口の近くでないといいですね」

「出来ましたら、真ん中ぐらいがいいですね」

「見つけますよ、三、四万円出すというならね」

次の日に契約出来た。アパートは、二階建。それぞれが独立していて、玄関も誰が入るか仕切られて見え

ないようになっていた。独身用というよりは家族で住める大きさだ。賃料は四万円。

周りは、ほとんど賃貸住宅になっているから、一人のオーナーだということが分かる。大きな農地をつぶしたのでらう。

家賃は高いが、隣との境も厚く造られている。アパート特有の安普請さが無い、大学生対象のこのアパートに決めよう、一階の外れを決めた。礼金一と敷金一で、十三万五千円を払って、契約成立した。期間は二年間という。これだけしっかりしたアパートなら隣近所のトラブルは無いだろう。

妙子は、鍵を片手にもって下の階の「ど突きの水島に会わなくても済む」と思うと、スキップしたような気持になった。

次の日、新しく契約したアパートに布団と簡易ベッド、テーブルをタクシーで運んだ。部屋の掃除は、前のアパートで掃除慣れしているから、苦でないし、またきれいに使われていて問題はない。

(2)

佐々木妙子の、何くれとなく相談相手になっている元同僚、今は市の介護保険審査会のメンバーでもある

戸川未知子に電話が入った。

「部屋が見つかったよ、見つかりました」彼女に似合わない明るい声が飛び込んで来た。

二週間以上妙子から電話がなかったたので、戸川未知子は心配していた。二番目のアパートがだめ、と結論付けてから、はや、一か月たつ。こんなに空けていると彼女は不眠症になるのではないかと、心配していた。もうマンションでは眠れなくなっていたから、どんな生活をしていただろう。もちろん入眠剤を飲んではいらるだろうと思っはいたが、電話がないと心配になる。

ひび割れた地声は、一言聞くだけで、妙子のものがあることが分かる。

「どこに、見つけたの」

「今度は少し遠いのだ。マンションから、一駅前、『T大学前』だけバスで行く。バスなら、カナちゃん手形があるでしょう、あれで百円でどこまでもいけるのを持つているから、大丈夫。往復二百円。家賃は四万円だから高いが、でも冷蔵庫も、エアコン、電子レンジ、ガスレンジもある。学生相手だから備品はそろっている」

「部屋の設備があるなんか、初めてじゃなかった、今

までは暑さ寒さに応じて器具をそろえてきたでしょう」

「そうね、だから今の学生用アパートはしっかり出来ているし、環境がいい。日中いると静かなの。ここで介護保険審査会の勉強をしようかなと思っているの」

「それは良かったじゃない、貴方のことだから、時間かけていいいにやるから、ね」

佐々木は、仕事が丁寧だ、どこを訊かれても、応えられる。未知子などはなるべく早く簡単にやっしまおうという、心構えと違う。未知子は、どのレポートもみんな似ているように思っはしようがない。特記事項までしっかり読むが、ほとんど変わりがな。

「仕事にも使えるならよかったでしょう、マンションでもできるでしょうよね、お金勿体なくない」

「このぐらいのお金なら、大丈夫よ。バス代入れても四万五千円だから、安いわよ」

「なら、いいけど、でも男性ばかりのアパートか、なんか火中の栗拾ったみたい」

「昼間は静かよ、夜は、まだ泊まっはいない」

「学生さんだから、昼はいいないでしょうが、休日はどうかしら」

「いや、休日もいいと思っ、大丈夫よ」

「それならいいけど、もう手続きすましているんですよ、私何度か携帯に連絡入れたよね」

「知っている。でも気持ち的に電話する気にならなかった。ブンチョウの調子も悪かったから、環境のいいところに引っ越したかった」

「じゃ、ブンチョウも、T大学前に、つれて行くのね」

「もちろんよ、彼が落ち着かなかったから、急いだの。大丈夫、きつとここで日中過ごせば、ブンチョウも落ち着くよ」

そうか、と未知子は合点が言った。アパート移転のために、彼女はエネルギーを使ったのだ、そしてここに来て、落ち着いたので、未知子に電話をくれたのだ。

「良かったわね、落ち着いて、安心した」

「大丈夫よ、私の理解者は、マンシオンに一人、美容師の竹川さんがいるから。ほかの人に相談すると、大方は、夜眠れないだけで、部屋を探すなんて気違いよ、と軽蔑される。とても音の妨害を信じる人はいない。ほかの人にはわからないのよ。どんなに苦しいか、あのおジイ、どこかに行ってくれないかなと思っているわよ、でもその前に私が死んでしまったら、どうしようもないわ」

「マンシオンに相談者がいてよかったじゃないの」

「ブンチョウもかわいそうだし、彼が騒ぐときなど手を付けられないよ。一晚中ゲージの中で暴れるのだからね」

「すつかり、あなたと一心団体になった」

「もともとよ、マオが安定しなければ、私の生活は落ち着かない」

「ブンチョウはどんな色だったけ」未知子は、昔見せてもらったことがあるが、すつかり忘れてしまった。

「あの羽毛の色が癒し系でしよう、グレイではない高級な薄墨色。寂しい時なんか友達よりも話を通じる」

「まさか…」

「そうよ、そのまさかなの、私は、マオがいなかったら。きつと下のおジイと同じ、アル中になつていたかもね。おかげさまで、彼を枕元に置いて寝ると心が鎮まる」

「わかった。お落ち着いたら、顔見せてよ、昼ごはん食べよう」

「そのうち、アパートにも寄つてね」

「了解」

と返事はしたものの、未知子の感じでは、心配だった。男性恐怖症の彼女がなんで、男性に特化したアパートに住む必要があるのか、わからなかった。この選

び方が偶然なのか、それとも、紹介者の無意識によるものなのか、どっちだろう。しかし、彼女の電話の声は、活気があった。それだけでなくこの転居先に希望さえ持っていた。

「落ち着いて、静かよ。集中力が出る。やはり学生を対象にしているから、隣とか、一階からの物音もない」
「マンションで、できないの、あそここそ静かじゃないの」

「それでもないのよ、マンションでは自分のテリトリ―だから、ア、ここが汚れているとか気になってしまふの、だから、落ち着いてゆつくりすることができない」

「そうだったの、だから、図書館に行っていたのね」
「これからは、新しいアパートで、審査会の勉強をする」

そんな会話をしたのが、六月半ばだった。七月、八月と佐々木から連絡がない、未知子は、妙子の電話のないことを良しとして、自分の方からは電話を入れなかった。転居の相談もマンションの嫌がらせも、ほどほどに聞き疲れていたし、相談に乗ってももう解決策も思い浮かばなかった。不動産屋に任せ、彼女の不安症候群から、離れた方がいいのではないかと思うよう

になっていた。

三か月近く。彼女からの連絡は途切れた。順調に言っている時には、今までも連絡がこない日はあった。

困ることがあれば、彼女の方から連絡が来る、その習い、彼女の自発性に期待して、先に電話を入れなかった。まして今回は、彼女が含むことがあるのか、男子アパートに入った。彼女の中にある意図した方に進むかもしれないと、先走らないようにした。審査会の中では、顔を合わせることはあったが。アパートのことには一切触れなかった。

十一月末、介護保険審査会が終わって、未知子は、後輩の佐々木妙子とともに、市役所の通りを駅の方に歩いているときに、空を見上げ、この鳥何の鳥かしらと突然大声を挙げた。

空を見上げると扇状に鳥が、広がっている。一か所から飛び立った鳥の群れ。

「あれ、何という鳥」

「えーと、ムクドリでしょう」

秋の空がブルーに透き通った日が落ちる前、群生が目立つ。

「盆地に多いよね。駅のクスノキに止まっているとき、

すごい声で鳴くヨ。キュルキュル、リヤーリヤーという感じ」

「良く知っているね。鳥に詳しいとか」未知子は妙子に訊いた。

「詳しいというほどじゃないけど、鳥が好きなの。マシヨンではブンチョウを飼っている」

「知らなかった。ブンチョウですか。可愛い」

「可愛いよ、人懐っこくてね、くちばしのピンクが何とも言えない、アイリングも真っ赤」妙子は、ブンチョウのくちばしをまねするように、口に手をもっている、ピッピッピョと鳴いた。

「じゃ、帰るのが楽しみでしょう」

「楽しみよ、誰かが待っていてくれるというのは、いいものよ。ドアを開けると反射的に彼がバタバタとゲージの中で音を立てる。この待たれる感がたまらない。『帰りました。寂しかったの』と訊いて自己満足する」

「開けてあげると、どうする」

「真っ先に私の肩に停まる。遅いと言う感じで、大声を上げる」

「そしてどうするの」

「私がゴメン、ゴメンというと、ピーと飛び立って行く」キッチンの窓際にある、棚に止まって、私を観察

する。そこでしばらくマオと話をするのがたのしみ。

「お友達とコーヒー飲んできた、映画は、吉永小百合主演の『不思議な岬の物語』ストーリーが良かった、阿部寛も素敵だった」と一日あったことを友達に話すようにしゃべる。

「ブンチョウは黙って聞いているの」

「そうよ、ことによると肩に止まりに来る」

「どうして」

「なんか食べたくなるのでしようね。その時は、私の手を嘴で突く」

「お菓子を上げるの」

「お菓子は、欲しがらない、エゴマが好きなのよ、もう好きなものを用意してある」

「その他、どんな実がいいのかしら」

「小さい子ならコナラの実なら喜ぶよ」

こんな会話を歩きながらした。

市役所の前を流れる川の淵を歩いてきて、駅前に着いた。この川は、いつも水の流れが少ない、なぜかと言うと、山から下ってくる水は、流れる前に川底にしみ込んでしまう。そして地下水がたまる。盆地の地下水は、芦ノ湖の二・五倍はあるという、想像つかない

地下水の量を信じて、豊かな自然の土地として市民は自慢している。川が枯れても心配しない、見たこともない地下水があるから、大丈夫と、盆地の人は信じている。

「サヨナラ、じゃ、来月、ここで会いましょう」と言つて別かれた。

妙子は、駅前で買い物をしてゆくという、彼女の後姿を見ていると、もたもたと体を揺らしながら歩く。

今日の彼女は少し表情が硬い、笑顔も少なく顔色も冴えない、不安を抱えている証拠だ。しかし審査会のレポートはしっかりと読んでいるし、質問もする、そこから押して、全然変わったところもない。ケースワーカーとしてのセンスには問題ない。洋服などは少し地味かと思うが、地味な服装は前々からだから、ここに至つてだけではない。寝る場所を探していると聞かなければ、せつぱつまつた様子は、外からは見えない。

十二月に入った日、また佐々木妙子から話を聞いてという連絡があった。

未知子は、彼女の話 wait していた割には、気が進まなかった。きっと彼女の身に予想していないことが起きてくるような気がした。

駅の改札口に、彼女は、待っていた。いつもの地味な綿のブラウスに茶の帽子を被つて、若い時のスタイルだ。なんか、楽しい話が待っているよう、案外深刻でなさそうだ、と一瞬安心した。

いつも行きつけの駅の構内にあるミスドの二階に上がった。ここに来ると彼女は、シュークリームを頼む。

未知子はコーヒーで、彼女に付き合う。本当はビールでも飲みたいがアルコールはない。

「落ち着いたの」と未知子は、先手を打つて話に入る。本当はくちやくちやした話は、いやなのだが。

「まだ、アパートには、三晩しか泊まっていけないんだけど、眠れなかった」

「うるさかったの、」

「だめよ、隣りが誰かもわからないので、不安でしょうがない、もちろん、何度も挨拶したけれど、出てこない。物音はするのよね」

「挨拶する習慣がないのでしょうか、男子の学生なら、そんなものよ」

「でも、左側の人は、こんにちほど首だけ出した。ビール一本とおせんべい一袋あげた。二階の学生も首を出したから、その子にも、上げたら取った」

「だって、男の学生でしょう、みんなどんなおばさん

が入ってきたのかと、物珍しく、顔を出したのよ。女性性は、あなた一人でしょう」

「そうよ、一つの部屋だけ空いていたのですもの」

「いくら」 佐々木妙子との会話を続く

「敷金、礼金入れて十三万五千元よ」

「高かったのね」

「でも、私は契約したのよ」

「オーナーは、近くにいろの」

「いない。小田原とか」

「責任ない仕事をするのね。儲けだけしか頭がないオーナーだよ。それで、隣の男はどうですか」

「日中契約した時には、誰もいない感じでよかったの、でも夜になると、学生さんがいっぱい帰ってきて、わあわあ騒いでいる、びっくりした」

「……」

「うるさいと、不動産さんに言ったところ、その日のうちに隣の部屋に換えてくれた」

「どこへ行っても同じよ、男子学生を対象にしたアパートへ引越したのが、問題よ。男性の居城へ行つて、嫌い、という言葉が通じると思ったの」

「思ったわよ、静かな夜を求めてアパートを転々としていたのだからね」

「だから言ったでしょう、それが間違っているのよ。男性の居城へ、貴方が入ってくることが、おかしいのよ」

「だって知らなかったもの、きちんとした所だと思つていた」

「一週間、泊まつてごらん、きつと猛烈に反省するから」

「いやよ、もう決めてしまったのだから、動かないよ」

「どうぞお好きにしてください。今晚、泊まりますか」

「いいえ、明日も審査会があるから、ここの市役所に来たいので、今晚は駅前のアパホテルに停まるつもり。この頃アパに、よく泊まるんだ。親切だよ。テレビは見放題だし、何分、隣の物音がしないから、助かる。ぐっすり眠れる、値段もあつてないようなものだし、アッパーが五千五百円で。下は二千七百円の日もある」

「そんな話始めて聞いた。なんで安くするのだろう」

「客が少ない週内は、どうしてもね、安く泊める」

「さて、今晚はいいとして、明日から、どうするか。

二、三日中に決めなさいよ。体だけは大事にしてね」

「分っています、じゃあ、ね」

佐々木妙子は、ビニール袋とハンドバックをもつて、後ろも見ずに、さっさと帰っていった。どうせ、二、

三日中には、必ず来るだろう、と予想して別れた。

一日置いた次の日、佐々木は二日前と同じ顔をしてミスの二階に上がってきた。

「夕べ泊まったが、ほとんど寝ていない」

「なんで、音がうるさかったのでしょうか」

「音というのか、一晚、アパートが動いている。どたどた、という二階の廊下を歩く音、下では、それぞれの部屋から、話し声がある、男の声だけでなく、女性も混じる。それも下品な声で、耳を閉じたくなる」

「だって、男性のアパートでしょう、女性を引き込んで、どこが悪いと言われそうよ。何しろ、大学の寮とは違うのだから」

「そうかしらね、私はそこまで考えなかった。確りした建物だからいいと思った」

「今はね、女学生だってアパートには入らないよ。みんな賃貸マンションか、大学の女性寮。女というだけで危険だ。あなただって何されるかわからないわよ」

「まさか、こんなお婆さんを」

「お婆さんかもしれないが、男性のアパートに入ってきただけで、みんな興味を持ったと思う」

「どうしたらいい、」

「それは、あなたが決めることでしよう。私の意見は、

早めに契約を解除することに尽きる」

戸川未知子は、長年、自宅の傍に賃貸住宅を営んでいるので、契約については厳しく、物おじしい見解を持っている。

今年になって、アパートを三か所、そしてそのたびに買い込んだ家具は、無駄だったが、大学生に侮られるよりはいい。彼らの好機の眼にさらされなくて済んだ。しかし、なぜそんなところに入ってしまったのだろう、安住の眠りを得るために、かえって墓穴を掘ってしまった。アパートが避難所になるとは、ゆめゆめ思っではいなかったのに、こんなしまったのだろうか、と佐々木は、目が覚めたかのように、一睡もしない中で苦慮していた。一刻も早く出ることだ。来月には、手続きをすべてすまし、マンションに戻らなければならぬ。

一番先に行くのは、不動産屋だ。

「望荘を出ます、短い期間で出ることに決めてしまつて、ごめんなさい、先月払った、今月分の賃料は、退去の予告時期の支払いとして、でよろしいでしょうか、」

「じゃ、退去の手続きをします、ここに印鑑を押して

ください」と言われ、妙子は前のアパートと同じ三月で解約した。

この惨状を見た、戸川未知子は、佐々木妙子に、先輩としてだけでなく賃貸住宅経営の経験者として提案した。

マンションの騒音におびえる妙子が、元の生活に戻すことは無理だ、と知って、

「私の貸家に来ない、今なら小さな一軒家が開いているよ」

彼女が、マンションに戻れないことを知って、率直に話した。

「ありがとう、今晚アパホテルでよく考えてみるね」としおらしく返事した。

未知子は、今まで何回も彼女の惨状、悩みを見てきてはいるが、決して自分の貸家には誘わないと決めていた、その縛りを解いて思わず誘ってしまった。彼女は貸家という一軒家には興味を示すはずはないという、未知子の思い込みもあったし、また彼女のようなブライドが高く、物音に被害妄想のある人には小さな一軒家は、見向きもしないだろうと思ってもいた。ここで断られるのを覚悟で誘ってみた。

「え、戸川さんの貸家空いているの、でも古いのでしよう」

「アパートよりは古い、でも古いから、普通よりは七割ぐらいの値段。先月空いたところは五万五千円かな」

「そんな値段で貸してくれるの、でも動物持ち込み禁止でしょう」

「猫はだめだが、小さな犬ならいい、けど」

「ほんとう。二、三日考える、ホテルを使うよりも安くなるし、ブンチョウも連れていけるなら、最高。そろそろブンチョウも番で飼ってあげたいの、前からオスだけでは可哀そうだと思っているのよ」

「いいことじゃない。佐々木さんは、なぜ、ブンチョウに、そこまで、こだわるの」

「こだわるわけではないが、好きなのよね。飼っていると、私になつくし、話が分かるようになってきた。かわいがっていると、家族に似て、危険も、教えてくれる。でも下のおジイと相性が悪く、あのマンションで留守番させているので可哀そうなの、神経衰弱になってしまいかも。そうかと言って、アパートは連れていかれないし」

「小鳥ぐらいは大丈夫、以前は牛みたいな犬を連れてきた人もいた。その時にはびっくりしたけど。今は、

金魚を飼っている人と、ダックスフントを飼っている人がいる。敷地が広いので野良猫が来てしようがないけど、今は庭先にいろんな小鳥が来る」

「どんな鳥」

「スズメ、ツバメ、メジロシ、ジュウガラ、ハト、ヤマガラ、ムクドリ、ヒヨドリ。ハトも来る」

「私が知っているのではスズメとツバメかな。いいな、そんなところへ、ブンチョウを入れたら。小鳥の樂園になるね」

「金魚をたくさん飼っている人が、ついでに小鳥たちの餌までばらまくの。結構、賑やかだよ」

「私はほかの鳥などどつちでもいいから、ブンチョウを元気にしたい。このままだと鳴くのを忘れてしまう」

「なによ、あなたが、家を、留守にするからいけないのよ」

「そうかもね、じゃ、あなたの家を見に行くから、明日は、いかがですか」

「どうぞ、でも長年いた人が出たばかりだから、まだ修理していない」

「いいよ、修理費結構かかるとしよう、現状のままでもいいですから、見せて」

「わかった。でも契約は不動産屋を通すからね、直接

は決して貸さない。後々問題を起こすから」

「了解、見るだけなら、いいでしょう。明日行きます」

という流れで、佐々木妙子と、約束ができてしまった。未知子の中には、四〇年近く、彼女の相談役で徹してきた、ここで賃貸という関係になつていいかな、という一抹の不安が過ぎた。

「気難しい関係になりたくはないけれど」とまたひとしきり、心が揺らいだ。しかし、元同僚として見て見ぬふりはできない、「当つてくだけろ」と思えたときには心が落ち着いた。

「物件の契約は、駅前のH不動産さんに任せています」

次の日、H不動産屋から、電話が入った。

「さっそく今日、契約しました。家は前に見ているので、下見はしないと行っていました。家が広いので、一部屋閉めて、その分、安くしてという相談がありました。したが、それは断りました。ともかく、「寝」に来るだけだからとも言いますけど、それは、そちらの事情でしょうと、丁寧に断りました」。

さらに、「寝に来るだけなんか変な客ですね、ブンチョウは大丈夫でしょうか」と、不動産屋は心配する。「賃料は、仇やおろそかにつけていないのではない、時

佃相場で、家の火災装置災害、そして防犯の守りまで、付いている貸家で、入居者の安全を守って扉まであるのだから、家賃の増減はしません、賃貸業は責任のある仕事です、今まで長年やっています、問題を起こしたことはありません、だから、「賃料の相談には乗りません」と返事した。

友情は友情として付き合うが、賃料を安くしてほしいという友への貸し出しは中止にして貰っても構わない、一軒家の貸家は半年と空いたことがない、ずっと使ってもらっている。だから、未知子は、賃料の相談には乗らなかつたし、余裕を持って待っていた。

次の週、佐々木妙子は、布団一組と掃除用具をもつて入居してきた。もちろん彼女のルームメートのブンチョウの入った鳥かご持ってきた。

鳥かごは、玄関から入った洋間のテーブルに置かれた。ブンチョウは、新しい家に入っても彼女がいれば、おとなしい、新しい環境にすぐになじんだ。

未知子名義の賃貸一軒家は、古く四十年も経っている。しかし、建て方は宮大工が建てたというだけあって、地下がしっかりしている。それだけでなく、未知子は、毎年、シロアリ検査をすましている。床の不

具合さはない。外回り、外装、屋根のペンキも、きちんとしている。いつも新しそうですねと褒められる。

しかし間取りは古臭く、四つに区切ったような、部屋割りだ。マンション暮らしの彼女はすぐに飽きるだろう。その時はなんと言って出るだろうか。地下からの物音はない、次の物音は隣であるうか、隣の貸家は五、六メートルは離れている、日中でもテレビの音さえしない。音を立てるのは貸家の敷地から、用水路一つ離れた向こう岸を通っている、バイパスがある、この自動車の通行騒音をうるさく聞こえるとしたら、生活できないだろう。

本当に、五万五千円も投資して、マンションから二十分もかけて、夜だけ来る賃借人なんかおかし。そして、部屋に物音がする、と言われたら身もふたもない。この家で、地下から物音がするはずはないと自信はあるが、でも彼女のアパート遍歴から考えると、有るかもしれない。さて、どう転ぶか、本当にマンションの下の住人とは相性が悪く、必ず、毎晩、天井のど突きに悩まされてということ、正しいのか、どうか、この家で決まるだろう。

未知子は、自分の本拠地へ彼女を連れ込んだ朝、誘い込んだ妙子の様子を探りに賃貸住宅、四棟並ぶ広場の掃除、草むしりに精を出していた。

「佐々木さん、ちよつと外へ出てよ」と叫んだ。

彼女は雨戸を繰っていたので、すぐに庭先に降りてきた。

「これが、ハクセキレイよ、見てごらん」砂利を敷き詰めた広場を歩いている。

「あ、本当、この辺にどうしているんだらう。川があるの」

「あるある、南側が川よ、人工の川みたいだけど、昔は、田んぼに入れる用水の堰があった。その名残かしら、毎朝みられるよ、ちよこちよこ歩いてくる」

「いいなー、こんな景色、久しぶりよ。ほら、ツバメもいる、もうそろそろ、子供のツバメも孵るよ」

「その竹やぶには、ウグイスが鳴くし、ついでにメジロも飛んでくる」

「どうして」

彼女はパジャマの肩にバスタオルを掛けている、

「そうね、この家の隣り、二年から入った金魚の趣味の人が、鳥にも餌をやるようになったからかな。はじめはメジロだけだったが、いつのまにか、珍しいオナ

ガやコゲラが来るようになった」

「へイ、信じられない、じゃ、きれいな鳥、なんていつたかしら、秦野市の鳥までくる」

「秦野の鳥って何」

「ウグイス」

「ウグイスは見たことないが、二月から向こうの藪で鳴く」

「良かった、いいところへ引越してきて」

「夜はいいけど、日中は、246号線につながるバイパス煩い。朝が一番ね」

「行ったり来たりというのよね。ここへ来るときの車がない、タクシーでしょうか」

「確かに、バスでは無理よね。自転車がいいよ、健康にもなるし」

「そうだ、自転車を買おう、自転車に乗れば、夜、よく眠れるでしょうね」

「お好きなように」未知子は、彼女の選択にゆだねて、これ以上の世話はしないと決めた。

未知子と妙子は、貸家の軒先にある敷石に座って、庭を眺めている。

この時期グラジオラスが色鮮やかな黄色、紫の花をつけて、楽しませてくれる。どの貸家のベランダも、

毎年同じ花をさかせるから手入れが楽だ。貸家一つのグループとして管理できる、コテージみたいね、と褒められる、

「きれいにしておかなければ。いかにも貸家だというイメージが嫌いよ」

「きれいになっていっているじゃないですか」

「それで、今日はどうするの」

「用事があるので、マンションに帰ります。歩いて帰ってみます」

「必要なものあったら、教えてね、ガス屋さんは、まだ頼まなくてもいいのね、あくまで、仮住まいよね、だから3か月間のみの契約。このやり方は、私も初めて。もしブンチョウが心配だったら、私が預かるし、庭先にもたくさん小鳥が来るから、ブンチョウも野生化して『野鳥ガイド』に載るかもね」

「エ、ブンチョウは外来種だよ、野生化したら困る。話のわかる友達がいなくなると寂しい」

「ここに来れば、金魚屋さんもいるし、犬も庭先を走っているから寂しくないと思うよ」

「ありがとうございます」と、妙子は神妙に頭を下げた。

妙子はよく眠れたせいかすがすがしい顔で、

「明日また来ます」と言って帰っていった。

完

*ADHDとは、注意欠陥多動症